

源頼朝 坐像

木造

シンボル展
山梨県指定文化財



令和5年 1月21日(土)~2月20日(日)

山梨県立博物館
Yamanashi Prefectural Museum

日本最古の 鎌倉殿が、 やって来る。

現存最古の頼朝像
源頼朝の肖像で、中世以前に制作が遡るものは少ない。彫刻としては、満昌寺(神奈川県)に伝わる源頼朝坐像が、台座に残された元亀元年(一五七〇)の銘により、頼朝像として制作されたことが明らかでない像として知られている。また、現在東京国立博物館の所蔵で、もとは鶴岡八幡宮の白旗神社(神奈川県)に祀られていたという伝源頼朝坐像は、十三~十四世紀頃の造像とみられるが、頼朝像として制作されたかは不明であり、北条時頼像である可能性も示されている。さらに源頼朝の肖像画として著名な神護寺(京都府)所蔵の伝源頼朝像も、足利直義を描いたものであるとの説が出されている。

頼朝像修理の一年前、令和元年度には、源実朝像の修理も行われた。その際の科学調査では、実朝像に使われた木材は、承久四年(一二三二)以降さほど時を経ない時期に伐採されたことが明らかとなっている。実朝が亡くなったのは建保七年(一二二九)なので、実朝像は逝去して間もなく造像された可能性があり、その際に父である頼朝の像もあわせて制作されたとの考えもある。実朝像は像高が七五・〇cmと、頼朝像よりやや小さい。そのため、三代將軍御影堂などに安置される場合、頼朝像を中心に左右にやや小さい実朝像と頼朝像を配置したのではないかと推測もなされている。



背面



像底

主な参考文献

- 三山進「武士俗体肖像彫刻について」『三浦古文化』第3号 1967年(「鎌倉時代の武士俗体肖像彫刻について」と改題『鎌倉彫刻史論考』有隣堂、1981年所収)
- 山田泰弘「甲斐善光寺の肖像彫刻 一源頼朝像など一」『三浦古文化』第29号 1981年
- 山田泰弘・吉原浩人『甲斐善光寺』定額山善光寺 1982年
- 米倉迪夫「源頼朝像—沈黙の肖像画」(絵は語る4)平凡社 1995年
- 特別展「没後八〇〇年記念 源頼朝とゆかりの寺社の名宝」神奈川県立歴史博物館 1999年
- 『山梨県史 文化財編』山梨県 1999年
- 『山梨県史 資料編7 中世4 考古資料』山梨県 2004年
- 清雲俊元ほか『甲斐善光寺』(山梨歴史美術シリーズ3)山梨歴史美術研究会 2009年
- 黒田日出男『源頼朝の真像』(角川選書490)角川学芸出版 2011年
- 特別展「武家のみやこ 鎌倉の仏像 迫真とエキゾチシズム」奈良国立博物館・読売新聞社 2014年
- 星野安治・中村賢太郎・明珍素也「甲斐善光寺木造源頼朝・実朝坐像の解体修理に伴う年代測定」『奈文研論叢』第3号 2022年
- 川瀬由照「グラフ 蘇った鎌倉殿 解説」『芸術新潮』第73巻第7号(通巻871号) 2022年
- 『北条氏展』鎌倉国宝館・鎌倉歴史文化交流館 2022年

頼朝像、信濃より来たる

甲斐善光寺は、永祿元年(一五五八)、武田信玄が信濃善光寺の本尊をはじめ諸尊を甲斐に遷して開創した。現在同寺に伝来する源頼朝坐像も、この時に数々の寺宝とともにもたらされたといわれている。本像は、像高九七・二cmの堂々たる等身大の像で、昭和五四年(一九七九)に山梨県の有形文化財指定を受けた。近年では、源頼朝の真の姿を最も良く伝える像として特に注目を集めている。

元文三年(一七三八)に著された『甲斐善光寺縁起』中の「甲陽定額山内霊像記」には、同寺に伝わる宝物やその由緒などが記されており、そこには「鎌倉三代將軍御影」との記述がある。それによれば、信濃善光寺への源頼朝・頼朝・実朝の三代將軍の御影(肖像)安置は、彼らが行った莊園寄進等による寺門興隆に対する恩に報いるために行われたものであり、それらが後に信玄により甲斐に遷されたものであるという。

『甲斐国志』『甲斐国社記・寺記』などによると、甲斐善光寺では、「鎌倉三代將軍御影堂」に安置されていたようだが、御影堂は安政年間(一八五四~一八六〇)の地震で倒壊してしまっただけらしい。

現在、甲斐善光寺には源頼朝像と実朝像が伝わっているが、残念ながら頼朝像は確認されていない。しかし、宝暦二年(一七五二)に著された『裏見寒話』には、「頼朝・頼朝・実朝の古き像あり」と記されていることから、少なくとも江戸時代中期までは三像そろって安置されていた可能性がある。

シンボル展
山梨県指定文化財
木造源頼朝坐像

編集・発行 山梨県立博物館
Yamanashi Prefectural Museum

〒406-0801 山梨県笛吹市御坂町成田1501-1
電話 055-261-2631

協力者(敬称略)
甲斐善光寺、株式会社明古堂、甲府市教育委員会
本リーフレットはシンボル展「山梨県指定文化財 木造源頼朝坐像」(令和5年1月21日④~2月20日⑤)の内容を紹介するものである。掲載写真はすべて株式会社明古堂より提供を受けた。なお、本文の執筆・編集は近藤暁子(当館学芸員)が行い、本文中の銘文翻刻は令和2年度に行われた修理時に撮影された赤外線写真をもとに海老沼真治(同)が担当した。

印刷 株式会社 内田印刷所 〒400-0032 山梨県甲府市中央2丁目-10-18 電話 055-233-0188
令和5年1月21日発行



頭部右斜



頭部左斜



頭部右側面



頭部左側面



右側面



左側面

頼朝像の姿と構造

源頼朝像は、巾子冠（後ろの部分に髻を入れる巾子がついた冠）を戴き、強装束（厚めの布や糊で張りを持たせた布で仕立てた角ばったシルエットの装束）をまとう姿をしている。両手首より先は失われているものの、もとは笏（しやく）を手にしていたと思われる。ヒノキ材製で、いくつもの木材を組み合わせた寄木造りの技法で作られている。木材の内側は削り抜かれており、像の内部は空洞となっている。目には玉眼と呼ばれる水晶をはめ込む技法が用いられ、像の表面は彩色で仕上げられていたと見られるが、現在ではそのほとんどが剥落している。

表情は、両目はやや下がり、鼻は大きめの鷲鼻、口元は強く結んで口角をやや下げてあらわす。頬の肉付けにも抑揚をつけ、目尻に皺を刻むなど、年齢を重ねた様子も写実的にあらわされている。一方、体の部分は左右に直線的に張り出した袖や、大胆にあらわされた鬘（むす）の様子など、面的で簡潔な表現が際立ち、表情の繊細な表現とは対照的である。こうした形式は、鎌倉時代に制作されるようになった武家肖像彫刻に共通する特徴といわれる。

像内に残された銘文

そもそも、何故この像が源頼朝の肖像だとわかるのだろうか。それは、像内に数カ所残されている銘文のうち、背面内側の部分に、頼朝の命日である「正治元年（二九九）正月十三日」という日付が記されているためである。

右大□殿、正治元年正月十三日
御臨□□□□御沙汰、此
御宮奉作、立善光寺遊□□
七節□送御堂奉了、雖両度之
焼失、□殿出御、得□□□□間、
被観□弥陀仏沙汰御繕□□
□如件
文保三年五月□日
（相・明）

この銘文は傷みが激しく判読が非常に困難なため、翻刻や解釈についてはいくつかの説がある。しかし、像が制作された趣旨や二度の火災に遭遇したことなどが記され、最後に文保三年（三三九）の年記があることについてはおおよそ一致している。

文保三年（三三九）以前の二度の火災とは、文永五年（二六八）と正和二年（三三三）の信濃善光寺の大火を指すと考えられている。そのため、本像が文永五年（二六八）以前に制作されて二度の火災を経て救出されたものか、あるいは失われて文保三年（三三九）に新たに制作されたものか、判断が分かれてきた。さらに、銘文の読み方によっては「尼二品殿」焼失、被取出御鉢首廻程了」の文字が読み取れ、本像が尼二品殿、すなわち北条政子により制作され、二度の火災から首だけが救出されたことと解釈できることから、北条政子が亡くなる嘉禄元年（二二五）以前に制作されたとする見解もある。

蘇った鎌倉殿

本像は令和二年度に所蔵者による解体修理が行われ、本体を構成する木材の緩みが整えられた。また、空洞となっていた目にも新たに玉眼が補われた。さらに頭部を体部に固定する位置が調整された結果、頭が体に沈みこむようになっていた印象が一新された。修理を経て、威厳に満ちた眼差しの堂々たる鎌倉殿の姿が蘇ったのである。

修理にあたっては、年輪年代測定や放射性炭素年代測定といった科学調査も行われた。その結果、体部に使われている木材が文保二年（三三八）秋頃から同三年（三三九）春頃に伐採されたものであることが判明した。一方頭部については、使用木材の伐採時期は十二世紀末以降である可能性が確認されるという結果にとどまったが、表面に残されている彩色や漆の年代が十四世紀初頭から十五世紀初頭のものであることが判明したのである。

このことから、体部は銘文に記された文保三年（三三九）に制作されたと考えられるが、頭部については体部と比べて写実性に優れた造形となっているため、それに先立って制作された可能性も考えられている。